

鉄 1 キロと綿 1 キロ、どちらが重い？

子どもだけでなく、「鉄！」と元気よく答える大人の方もおられます。「両方とも 1 キロだから同じだよ。」確かにそうですが、それはこの問題の 1 面を捉えているに過ぎません。ここの中心課題は「重い」の意味なのです。

1 キロはちょっと大変ですが、綿や代用品の梱包材を 0.5 キロ集めて袋に入れてみましょう。結構なかさになります。0.5 キロの金属を、ダンベルなどで結構ですが、用意しましょう。これら二つを同じ重さに調整し、手に持ってみてください。「同じ重さじゃん」と感じたあなたは人並み外れた客観性の持ち主で得がたい人材かもしれません。しかし、普通の人には老若男女を問わず「金属の方が重い」と感じます。目を瞑って持っても同じことです。それぞれに紐を付けて、手でぶら下げても同じ結果となります。但し、目を瞑って紐を手でぶら下げられると二つの区別は付きません。同じ重さですから。

このように、物体の重さを我々が評価する／感じる際に視覚情報が大きな役割を果たします。この仕組みについては、以下のサイトに依りますと、「投げやすさ＝重さ」と感じるように深化してきたためという説もあり、なかなか興味深いです。

紹介サイト：同じ重さの物体でも、大きさによって重さが違うと認識する理由

<http://transact.seesaa.net/article/192704541.html>

元論文：Bad at estimating? Blame evolution

https://evolution.berkeley.edu/evolibrary/news/110201_throwing

我々は常に秤を持ち歩き、全ての物の重さを数値化して評価はしません。持った感じ、見た感じを総合して「重さ」を捉えているのです。それが日常感覚なのです。その感覚と秤の数値にズレが生じた場合、感覚の上で一致させることは大人でも容易ではありません。子どもでしたら尚更のことです。ですから我々がすべきことは「違うよ量ってみてよ」という指導ではなく、現物を目の前にして「ホントだ全然違うね。でも量ってみると同じだよ。これはどういうことだろうね。」という寄り添いではないでしょうか。